
サチ子の取材日記・サンパウロ

土壠 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サチ子の取材日記・サンパウロ

【Zコード】

Z88041

【作者名】

土壇 友

【あらすじ】

サチ子はデスクの命令でブラジルサンパウロに飛ぶ。現地で田中氏に会い、インタビューをするためだ。

内容は、在日ブラジル人の帰省について。

意気込んで出かけたサチ子は、現地の状況と違和感を抱く。

『百聞は一見にしかず』

サチ子のレポートは合格し、サチ子は次の任務のため東京へ帰る。

はじめ（小説作成日記）

良い小説を書くには、良い小説を参考にすればよいと思い、早速実行することとした。

今回は、『12月1日静岡新聞の時評に掲載された「世界は回転扉」執筆者深沢正雪氏』を題材に短編小説創作の練習をしてみる。

サチ子の取材日記

土堀 友

成田から直行便で二十四時間かけてブラジルサンパウロに行く。ここは主に亜熱帯気候で十二月では最高気温が二六度前後となる。私は、日本の二十二倍の面積であるにもかかわらず人口は一億九千万人というこの国に取材にきた。

グアルーリヨス国際空港からタクシーで約四十分、リベルタージ駅前広場についた。今日はホテルに入り明日にそなえる。ホテルで軽く昼食を取り、午後広場にある明石家宝石店をのぞいてみた。日本との時差が十二時間あるためか、いや、懐具合の都合か、素敵なサファイアの首飾りを見つけたが買う気にならず、安物の真珠のブローチを一つ求めホテルに戻った。

次の日の午前九時、インタビューの田中氏は、すでにホテルの喫茶室でカフェオーレを飲んでいた。さつそくインタビューする。私の胸には昨日のブローチが揺れている、これが勝負アーケセサリーカと思うとすこし心細い。ひとしきり雑談のあと、单刀直入にぶつけてみた。

「日本では戦後最悪の景気で仕事もありません。どうして在日ブラジル人のみなさんはお国に帰らないのですか。」こちらはBRICS

とかいつて景気がいいと聞きましたが

かれは、この質問に何か違和感を受けた様子で、五分刈りの頭を撫でながら考え込んだ。

「サチ子さんはご存知ですか。ニッケイ新聞編集長の深沢さんですよ」。

突然話題が変わったことで動搖したが、そこに生まれたわずかな空白な時間に体制を立て直す事が出来た。

日本では、格差拡大と騒いだところで、最近まで一億総中流階級を自認できただけであり、職を失い、住居を失つて年が越せない若者はたしかに気の毒ではあるが、ブラジルは良くも悪くも世界の縮図である。

つまり、欧米並みの生活をする上流階級もいる一方で、北東部にはアフリカの貧困国並みの飢餓状態の人もいるし、アマゾン奥地には文明と未接触なインディオ部族すら同居する。思考の観点を変えてみなければダメなのだ。

「深沢さんは、新聞に記事を出しましたね、確か『世界は「回転扉」貧富差拡大、移住に拍車』でした」。

ミスター田中は、ティーカップを静かに持ち上げ、話を続けた。
「水は低い方に流れるが、人は高い方へ向かう習性があるようです」

私は急いでメモを取った。

「世界の富が集中するG8諸国というパラミッドの頂点に向かつてにじり寄るように、それ以外の約百九十カ国から移動しているのが移住と言えます」。

今回のテーマは日本に出稼ぎに来ているブラジル人だ。彼らは日本でひと稼ぎしたら祖国ブラジルへ帰るのだろうと思つてばかりいた私に、『移住』という言葉が投げかけられた。彼らは当初から日本に移り来たりて、そこに住居を構える気であったのだろうか。

ミスター田中は話を続ける。

「各国の貧困層は旅費すら払えないため、その動きは中流階級が

中心になります。国内に、もっと貧しい人が控えているから、その空きにはすぐに誰かが入る。例えば訪日就労したブラジル人の空きには、国内移民やボリビア、パラグアイから低賃金労働者がきて埋めてしまつ。彼らの元の国の隙間にもさらに貧しい労働者が、その空きを埋めることになる」

深沢氏は、誰かが出ると同時に次の人に入つてくるという移動、つまり、世界でその循環が起きた集大成が『回転扉現象』であると言つてゐる、というのだ。

私は尋ねた。

「世界の貧富差が広がり、なおかつ飛行機などの移動手段が発達し、先進国の豊かな生活がテレビや映画、インターネットで簡単に見られるようになると、さらに移動への動機は高まるのでしょうかね」ミスター田中は飲みかけのカップをテーブルに置いて

「先」ごろ日本の失業率が5%を超えたと騒いでおりましたが、同じごろサンパウロ大都市圏では、十五%近かったです。いざ在日ブラジル人が帰ろうと思っても、州の職業斡旋機関が紹介する仕事の平均月収は、千レアル程度（五万円弱）でしかありません。それなら、日本の景気回復を待ちたいと願うのも無理のないところです」

私は脚を組み直し、冷めたコーヒーを一口喉に運らせてメモ帳をめくつた。

世の中で何かを比べるときに、『絶対』と『相対』という二つの基準がある。私は戦後最悪という国内の相対的な基準で、絶対貧困を含んだブラジルを比較し、それを質問したので田中氏は何か違和感を受けたのであろう。

「日本にいっては気が付きませんが、『日本で日本人として生まれた』というだけで、私たちは実は世界の一握りしか手に入れることのできない豊かさ（裕福で安全な生活）を享受しているのですね」。話す私の口元を柔軟な顔で眺めていたミスター田中は

「そうですね、忘れがちなことです。逆に、それを肌身に感じて

いるのが在日外国人労働者かも知れません」「

かれは立ち上がり握手を求めた。

おおきな暖かい手で、強く私の手を握った。取材はこれで終わりですねと言つてかれはホテルの回転扉を押して出て行つた。

私は部屋に戻るとすぐレポートの作成に入り、サンドイッチをくわえながら一時間ほどで完成したレポートを、東京支局に送つた。リベルダージ地区：以前日本人街が形成され、中心部を貫くガルボン・ブエノ街の入り口に鳥居がある。移民した日本人がブラジルに溶け込んで空白ができ、その隙間に韓国人や中国人の移民が多く転入し、近年では東洋人街とその名を変えている。ということ、海外から見てみると日本の回転扉が不気味ではあるが、静かに回り始めているように見えること。を付け加えて。

折り返しデスクからメールがきた。

「サチ、レポート合格。次の仕事が待つてีいるのですぐ帰れ、エアーは予約しておく」。

デスクは完全なメタボで突き出た腹が机に食い込んでいる。前がかがむ事も出来ず、これでどうしてパソコンを打てるのだろうと不思議になる。

私は裸になつた。空港に電話して帰り便予約の確認をする。下着を外した解放感をそのままシャワールームに持ち込んで、肌にペッタリ貼りついている汗を一気に洗い流し、首筋からボディローションを塗る。手早く身支度を整え紺のスーツに着替えた私は、ベットの上に散らかっている小物や下着をスーツケースに押し込んで、一階ロビーへと向かう。

予約してあつたタクシーは既に玄関に横付けされていた。流しのTAXIは危険だ。東京行のゲートインは十九時三十分、さあ、急ぎましよう。

“Tchau/Adieu,”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8804i/>

サチ子の取材日記・サンパウロ

2010年10月10日01時36分発行